



スポーツのチカラ まちのミライ

2030北海道・札幌オリンピック・パラリンピック冬季競技大会が実現すると、
私たちの街・札幌はどのような姿へと変貌を遂げるのでしょうか？
札幌市を拠点とするパラスポーツクラブ「HOKKAIDO ADAPTIVE SPORTS」の代表理事を務める齊藤雄大さんと、
同団体に所属する岩見沢高等養護学校3年の長谷川宙さんのお二人にお話を伺いました。



北海道・札幌冬季オリパラを契機に
札幌を「冬季パラスポーツ」の聖地に

北海道メディカルスポーツ専門学校 専任教員
一般社団法人 HOKKAIDO ADAPTIVE SPORTS
代表理事 齊藤 雄大 さん

1989年、札幌市市出身。2017年に「ほっかいどう未来人財応援基金スポーツコース」1期生として単身アメリカへ。帰国後は北海道初のパラスポーツ拠点「HOKKAIDO ADAPTIVE SPORTS」創設のため尽力し、イベント開催やジュニア育成など、パラスポーツの環境整備に取り組む。

岩見沢高等養護学校3年 長谷川 宙 さん

2004年生まれ、札幌市出身。2019年より「HOKKAIDO ADAPTIVE SPORTS」に所属。全国の特別支援学校の生徒が社会や地域に対して未来への提案を行う「ミラコン全国ブレンカップ」では2年連続で出場し、優秀な成績を収める。

取材協力: HAS SOKO

パラスポーツ環境が向上しつつある今
冬季パラスポーツの認知度向上を

（齊）パラスポーツを取り巻く状況が大きく変化したのは、ここ10年ぐらいです。東京2020大会に向けて競技人口が増加し、企業による選手のサポートやアスリート雇用の拡充が図られました。

（長）東京大会でのTV放映などでパラスポーツの認知度も一気に上がりましたが、夏季に比べて冬季パラスポーツの認知度はまだまだだと思います。2030年北海道・札幌冬季オリパラの招致と開催が冬季パラスポーツの振興と認知度向上、まちのバリアフリー化の手助けになつて欲しい。そして、障がいのある人といない人が正しく理解し合つて互いに助けあえる社会の実現につながつて欲しいと思います。

オリパラの地元開催の意義とその先の夢
障害の垣根を越えたまちづくりの実現を

（長）冬季パラスポーツの知名度向上の方法としては、体験会の開催もそのひとつ、実際に競技に触れることで、より身近に感じることが出来ると思います。2030年の冬季大会ですが、オリパラには運営スタッフやボランティアなど、選手以外にも様々な参加方法があります。僕自身は競技のサポートや車椅子ユーザーのガイドなどで参加出来たらうれしいですね。

（齊）パラリンピックには、社会を変える力があります。障がいの有無に関わらず、スポーツを通じてお互いの理解を深め、みんなでアイデアを出し合いながら、すべての人が住みやすいまちを作つて行けたら、それがそが世界に発信できる「札幌らしさ」ではないでしょうか。そして大会を契機に札幌が冬季パラスポーツの聖地になることを願っています。

問い合わせ先

札幌市スポーツ局招致推進部調整課 ☎011-211-3042



食や自然など多くの魅力に恵まれた
「笑顔になれる街」さっぽろをイメージしたロゴです

問い合わせ先

札幌市総務局広報部広報課 ☎011-211-2036